

このたび入学されました新入生の皆さん、そして保護者の皆さま、まことにおめでとうございます。今日のよき日に、三百四名の新入生を迎えまして、金光藤蔭高等学校の入学式を挙行できますことは、この上ない慶びです。また、公私ともに何かとお忙しい中を、ご臨席賜りましたご来賓の皆さまには、改めて厚く御礼申し上げます。本校は、金光教の教えに基づく建学精神をもって設立された、金光教ゆかりの学園であり、来年には百年となる長い歴史と伝統を備えた学校です。今日からスタートする新入生の皆さんの学園生活を、ここからしっかりと見守ってまいりたいと思います。

さて、皆さんは「二十四節気」とか「七十二候」という言葉を知っていますか？どちらも季節の移り変わりをあらわす暦の数え方です。古代中国に生まれ、六世紀には日本にも伝わったといわれています。一年三百六十五日、春夏秋冬の四季をそれぞれ六つにわけたものが「二十四節気」、その一つずつを更に三つに分けたのが「七十二候」です。ですから、「七十二候」の一区切りは、約五日間ということになります。ちなみに、「気候変動」などというときの「気候」とは、「二十四節気」の「気」と「七十二候」の「候」を合わせた言葉です。

たとえば、今日、四月四日は、二十四節気でいえば「清明」、つまり、春の光を受けて全てのもものが清々しく明るく見えるという意味です。七十二候でいうと「玄鳥至(つばめきたる)」となります。その言葉どおりの意味で、ツバメの姿を見かけるようになるということです。実際、冬の間東南アジアで過ごしていたツバメが日本に渡ってくるのは、今ぐらいの時期だそうです。

温度計や湿度計もない時代、もちろん気象衛星など想像すらできなかった頃のことです。人々は、空を見、風を感じ、草木や生き物たちの動きに目を凝らし、いわば人が持つ感覚のすべてを動員して、季節を切り取り、暦を刻んでいったのです。そして、五日ごとに季節の移り変わりを感じて、それを言葉に表していった、その解像度の高さに驚かされます。それは単に、天候や気候というだけでなく、そこに生きる生き物たちへの共感と、ひいては、自然そのものに万物を生かす働きを見出すことにも繋がっています。

もちろん、昔の人のほうが優れている、現代人が劣っているなどというつもりは、ありません。今の時代を生きる私たちも、実は、同じように感じる事ができるでしょうし、現に感じているはずで、そして、このように広く見渡し、繊細に感じる事が、物事の見方を豊かにしてくれると思うのです。

「人間」とは、「人」の「間」と書きます。文字どおり、人が、人と人との間に生まれ、人と人との間で生きているのだということ表現した言葉でしょう。人は、人との関わりの中で、お互いに支え・支えられて生きているということです。そのうえで忘れてはならないのは、今、私たちはどこに、どのようにして生きているのか、ということとです。どこまでも広がる大空の下、いつまでも続く大地の上に、すべてのいのちを育む自然の働きを受けて、人は生きています。それは、他の生き物たちと同様と違っていいかもしれません。その中であって、人間は、社会を築き、家庭を営んで生活しています。そして学校もその中に有るものです。人が、人間として生きるとは、

そのような重なり合いの中にあって、いのちの歩を運ぶということとです。このような気付きは、生きることに深みを与え、時には救いとなることもあるでしょう。学校では、さまざまな知識を身につけ、考え方を学び、身体を整え、そして人との関わりの中で自らを育てていくことができます。どうか、大いに学び、豊かに生きてほしい。そして何より、いのちの感性を磨いてほしいと、切に願います。以上、縁あって本校の門をくぐられた皆さん方への、告辞といたします。

令和七年四月四日

学校法人 関西金光学園

理事長 湯川彌壽善